



実践 マタニティ診断

評者・三島 みどり 島根県立大学短期大学部

本書は、母児の看護を責任もって実践しようとする際に、診断を導き出す指導書として役に立つ良書です。

昨今のわが国においては、医師の卒後研修方法の変更などにより産科医師不足が顕著となり、助産師による本来の業務であるところの正常な妊産婦さんへの助産師によるケアの期待が一段と高くなってきています。

このような状況下で助産診断を行なうことの意義は非常に高く、助産師活動の根幹をなすと言っても過言ではありません。

的確な助産診断は母児双方の生命を守り、また、産科医との良好なパートナーシップや助産師

の専門性をより一層向上発展させることにつながります。

本書の前身として、平成16年に『マタニティ診断ガイドブック』が助産・母性看護領域のウェルネス型看護診断のさがけとして発刊され、臨床現場や教育において大いに活用されました。このたび上梓された本書は内容の充実が図られており、マタニティ診断を理解するための概要や妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の各期の診断類型と診断名のつけ方について詳細に解説がなされ、さらには診断の実際とケア計画の事例が示されています。

本書のマタニティ診断の特徴として、①看護職者のみならず、ケアの受け手である対象者にもわかりやすい診断名であること、②ウェルネス型看

助産・母性看護領域での 充実したケアの実践に



日本助産診断・実践研究会 編著
定価 3,990 円 (本体 3,800 円 + 税 5%)
B5判/医学書院/2007 年

護診断にもとづき、問題志向ではなく、対象者の強みや力を生かし、健康生活などに応じた課題達成を支援する根拠としての診断であること、③診断のための診断に陥ることのないよう看護実践との関連が重要視されていること、などがあります。

第1章では、マタニティ診断とは何か、その概念や定義をはじめ、他の診断との関連性や特性、診断のプロセスなどが具体的に解説されており、第2章から第5章にかけては、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の各期のマタニティ診断の特徴と着目点、診断プロセス、診断類型と診断名のつけ方、そしてケア

計画および事例からの展開例が示されています。

自身は助産師教育を担っておりますが、本書をよりどころとして学内講義を終え、今は助産学実習指導を展開中です。学生は、「診断類型・診断名、診断指標に沿って情報収集を行なうため、アセスメントや診断、ケア計画を学生なりに早く立案できる。また、対象者の全体像が学生なりにみえてくるようになっていく」と感想を述べています。

助産・母性看護領域のより良いケアの提供のために、また助産師の業務範囲の明確化や専門職性のより一層の高揚のために、ぜひ本書をお薦めいたします。